33

小浜藩藩医木下宗白の系譜と明治期以降の我が国産婦人科医学へのかかわり

石川　　源
日本医科大学産婦人科

十八世紀末に蘭方外科医となった木下宗白の系譜は明治維新を経て八代余続く医家の系譜である．

初代宗白～三代目宗珀まで：初代是安（1770–1831）は，若狭国小浜藩に士分 木下芳章の六男に誕生，16 歳で杉田玄白（1733–1817）に師事．宗白を名乗り 28 歳で蘭方外科医となり（1798）藩主酒井候より三人扶持を拝領した．二代目宗伯（1806–1859）は初代宗白の甥で医家を継ぎ，酒井候より御聴係として三人扶持を拝領した．三代目宗珀（1818–1877）は初代宗白の三男だが，二代目宗伯の養子として医家を継ぎ，同じく三人扶持を拝領した．

三代目宗珀と四代目凞：宗珀の後半生と凞（1844–1914）が生きたのは激動の時代である．それ迄何れの代も江戸杉田家に入門し医家を継いで来た為，宗珀は凞を杉田門下に学ぶ機会を得るべく杉田成卿に宛てて書簡を送るも叶わず．この時期，江戸安政大地震と大火が起こっており（1855）杉田家も甚大な被害を受けている．

凞と維新の激動：杉田家入門が叶わなかった凞は，川本幸民に蘭学を学び，幕府種痘所で西洋医学を修め小浜へ帰郷開業．酒井候の命で長崎に行き英書を学び維新を経て官医となる．凞は明治 2 ～ 6 年横浜でヘボン，シモンズのもと西洋医学実地の経験を得，京に出た．明治 6 年京都療病院に病院雇の職を得，京都衛生課雇，京都駆梅院院長，産婆取締等を務め自身の診療所を開業．

五代目正中：正中（1869–1952）は，凞の長男として小浜に出生．凞の変遷に伴い正中も京都に移る．その後医家を継ぐ勉学の為 14 歳で単身東京に出，獨逸学協会学校を経て第一高等中学校，（東京）帝国大学医科大学に進級（1890）．明治 27 年香港でペストの大流行が発生した．政府はペスト調査団の派遣を決定したが，この際，正中は医学生でありながら内科学教授青山胤通に同行する形で調査団に加わり，青山や北里柴三郎らと共に香港に渡った．日本の調査団の活動を記したラウソンの記録に正中の名は見出せないが，香港滞在中の正中は通訳や解剖助手として青山の活動を支え，青山がペスト罹患の際には献身的に介護した．医学部を卒業した正中は，当初スクリバ外科学に学び，福島県立病院副院長・外科医長就任．明治 30 年には 1 年半ドイツに私費留学し，この際，浜田玄達と同じくミュンヘン大学産婦人科ヴィンケル教授らに学んだ．帰国後，大阪府医学校産科婦人科教諭，東京帝大助教授，婦人科学教室主任を経て明治 37 年教授に就任した．正中は東京帝大キリスト教青年会に属しキリスト教精神に基づく活動に取り組み大正 7 年に吉野作造らとともに賛育会を設立し無料診療を原則の産院を運営開始した．

六代目正一，正中の子孫：大正 6 年に東大を依願免官した正中は日本橋浜町に浜町病院を開設．その利益を賛育会の運営に充てた他，10 人の子など家族の養育に努めた．六代目正一（1901–1987）は正中の長男で，東大卒業後九州帝大産婦人科に進み白木正博に師事．その後木下病院院長，賛育会病院院長として産婦人科臨床医療に努めた．正一には男子がなく嫡子系譜は絶えたが，正中の長女篤子は田村益雄（1888–1932，熊大泌尿器科教授）と結婚，木下姓を継ぎ，長男是雄（1917–2014，学習院大学長）次男佐（1921–，東邦大産婦人科教授）佐の長男俊彦（1954–，東邦大産婦人科教授）に続いた．三女直子の夫石川正臣（1891–1987，日本医大産婦人科教授・学長）は東大卒業後産婦人科に進み正中に師事．山際勝三郎のもと病理学研究に従事．関東大震災で，正臣は浜町病院の救援に当たり同院の人員・資材を避難．大学に残した学位論文資料の一切は焼失し学位を得たのは 21 年後．

まとめ：小浜藩藩医木下宗白は杉田家に師事し，その系譜は蘭方外科医として三代にわたり継承された．四代目凞は幕末期の災害や維新の激動期に杉田家師事の機会を逸したが西洋医となり京都に医業開業した．代々産科医ではないが，五代目正中は，学生時代に青山胤通教授の指導を篤く受け卒後スクリバ外科に学んだ後，産婦人科に進んだ．当初の動機付けは不詳だが産婦人科医として自立する明確な目的を持ち私費でドイツ留学を果たし，東大三代目産婦人科教授として後進を育て，自身の系譜から正一，正臣，佐，俊彦らの産婦人科医を輩出した．